

業、時には海外からのNGOなどの支援組織とも組織横断的な連携が必要になります。

特に名古屋市立大学病院は、南海トラフ地震発生時には最前線の災害拠点病院として役割を発揮することが名古屋市地域防災計画にも定められています。Society5.0といわれていますが、ITやAIの技術も活用して、災害時にも人的・物質的な資源を効率よく活用して運用する、つまり人や物を適切に繋いでいくという意識を持ち、想定される社会状況を意識してTEEPで学んでいただきたいと思います。

服部 受講を検討されている方の中には、実務経験はあるけれど災害現場での実践の経験や知識がなく不安を感じておられる方もいらっしゃると思います。減災・医療コースでは、まずはこれまでに現場でどういったことがなされてきたかを、いろいろな専門職から分かりやすい言葉で話してもらいます。それを踏まえて今後はどんな準備が必要かを考えていく機会として講義を提供しています。まずは講義で現状をしっかり把握してもらうことが大切だと考えています。

チームを動かすリーダーに

——修了後にどんな活躍を期待されていますか。

酒々井 やはりリエゾン、多職種連携の要になることです。また、教育現場では実務のバックグラウンドを持った教育者、災害現場や職場ではリーダーであってほしいと思います。

服部 予備知識以上にモチベーションが大事ですので、まずはやる気と興味を持って受講していただきたいです。そして、減災医療に関わりたいとか、実務経験をいかして教員になりたいとか、それぞれの目標を達成していただきたいのはもちろん、リーダーとして活躍していただける人には、TEEPを通してさまざまな人脈を作り、それを大いにい

かしてほしいと思っています。基本コースの受講生の方も、多様な背景を持つ方々と共に学んで人的なネットワークができたことが大きな宝になるとおっしゃっていました。私が何度も災害現場を経験して思うことは、やはり信頼できる人と人とのつながりこそが困難を乗り越えていく力になるということです。ここで一緒に学んだ人が、災害現場で再会した時、一緒に乗り越えていこうという気持ちが湧いてきたりします。そういう意味でも人脈作りも大事だと思います。

笹野 2025年に完成する「救急・災害医療センター（仮称）」では、それぞれの専門職が既に救急あるいは災害時の対応を学んでおり、部局ごとの対策はほぼできています。しかし、それぞれの専門分野を繋ぐ、つまりリエゾンができる人はまだ十分ではありません。減災・医療コースで学ばれる方にはリエゾンを実践、あるいは指導できる方になっていただきたいですね。

多職種連携PBL演習について、 岐阜薬科大学の林先生に伺いました！

★「減災・医療コース」の多職種連携PBL演習では どんなことを学べますか？

「クリニカル・クエスチョン（現場で抱く疑問）」を「リサーチ・クエスチョン（研究テーマ）」として構造化していく演習を行います。

「災害時にはこれが無い→こうすれば、医薬品が供給できるのではないか？」と仮説を立てて実証してみるようなことです。こうした研究に向かうときのマインドを持っていると、普段の業務上の課題も解決していきやすくなります。

★具体的な演習内容を教えてください。

演習の前半には東日本大震災の被災地を訪問し、実際に被災地で活動した人の話を聞き、現地での工夫や連携の方法を学びます。その後、大規模災害で被災地に派遣されたモバイルファーマシー（以下MP）を想定し、MP-MP間の医療用医薬品搬送におけるドローンの有用性の検証など、災害薬学に関する新たな研究を体験できる実習を行います。

2023年1月に「2023年度基本コース受講生」を募集いたします。具体的な募集方法については、Webサイトにのご案内させていただきます。

<https://teep-consortium.jp/>



TEEP コンソーシアム

中核校：名古屋市立大学
連携校：岐阜薬科大学 高知県立大学 中京大学

文部科学省「持続的な産学共同人材育成システム構築事業」

TEEP

進化型実務家教員
養成プログラム
NEWS LETTER

VOL.34

地震や水害など大きな自然災害が相次ぐなか、災害現場では、多様な専門家が連携して困難を乗り越えることが重要です。TEEPの専門コース（減災・医療コース）では、多職種連携の要となるリエゾンの役割を担える人材を育てたいと考えています。名古屋市立大学の酒々井眞澄教授、笹野寛教授、服部友紀教授にその熱い思いを語っていただきました。

（聞き手：TEEP事務局 プロジェクト推進員 伊藤承子）

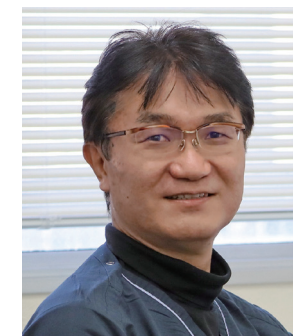
多様な専門職をつなぐ減災のスペシャリストを目指す 減災・医療コース・対談



名古屋市立大学 医学研究科
神経毒性学分野 教授
酒々井 眞澄さん



名古屋市立大学 医学研究科
先進急性期医療学分野 教授
笹野 寛さん



名古屋市立大学 医学研究科
先進急性期医療学分野 教授
服部 友紀さん

南海トラフ地震に備える教育

——初めに酒々井先生から「減災・医療コース」
の開設に至った背景についてお聞きます。

酒々井 名古屋市立大学の所在する中部圏では南海トラフ地震の発生が懸念されており、減災は喫緊の課題です。2025年には本学附属病院に「救急・災害医療センター（仮称）」が開設されます。

また、本学は公立大学法人の中で唯一医・薬・看護学部を擁しているほか、経済学部・人文社会学部・芸術工学部・理学部があり、来春にはデータサイエンス学部を含めた8学部からなる総合大学となります。進化型実務家教員が教育に関わることで、本学の研究力、教育力、産学連携力を高め、減災や社会基盤づくりといった社会のニーズにより応えられる、魅力的な大学となっていきたいと考えています。

医学研究科・医学部では2008年から「医療・保健学びなおし講座」というプログラムを開講していま



TEEP コンソーシアム

中核校：名古屋市立大学
連携校：岐阜薬科大学 高知県立大学 中京大学

す。さまざまな理由でいったん医療現場から離れた医師・薬剤師・看護師などの医療従事者が職場復帰するための支援を狙いとして、医学研究科の幅広い専門分野の教員や地域の専門家から最新の知識や技術を学ぶものです。6科目、90回で延べ120時間を超える授業を行っています。出席と毎回の課題レポートによる評価があり、一定以上の成績を収めると履修証明試験の受験資格が得られます。つまり、本学には10年以上にわたる社会人・職業人の再教育プログラムの経験があり、減災・医療コースを新たに立ち上げるのに適した環境があったのです。

——減災・医療コースは医学研究科、つまり大学院の修士課程の講義を受講するわけですが、どんな方を受講生として想定されていますか。

笹野 医師・薬剤師・看護師・心理師等の医療従事者や、栄養士・救急救命士・消防士・警察官等の災害現場で必要とされる職種の方に加え、自治体職員、企業の防災担当者といった減災防災に関わる職種で実務経験を有する方を対象としています。医療や行政の現場で働いていて、減災に興味があって学びたいという方を歓迎しています。

災害現場ではいろいろな専門職が共同して動く必要があります。リエゾンといいます、自分の専門領域と他の職種との間を上手に繋ぎ合わせる必要があります。普段の仕事の中で、リエゾンや多職種連携の難しさを感じた経験のある方も、学ぶことが多いのではと思います。



「TEEP減災・医療コース」の受講生は、大学院修士課程「減災・医療コース」の科目等履修生として授業に参加。

服部 受講資格として大学卒業が必須条件ではありません。何らかの理由で大学教育を受けられなかった方で、救急救命士や消防士、自治体職員等、第一線で働かれており、現在リーダー的な立場、教育的な立場に居られる方も、教育論を含めた専門的なことを学んでいただけるコースとなっています。学ぶ意欲があって、教えることが使命の方々や、災害の知識を身に付けたい方に受講していただきたいです。

——医療や行政の第一線で活躍されている方は、大変忙しくされていることが多いと思います。仕事と学習の両立は可能でしょうか。

酒々井 減災・医療コースの授業は基本的には全て午後6時30分から午後8時にかけて、Zoomで行われています。働きながらも受講しやすいのではないのでしょうか。

服部 減災・医療コースでは大学院の修士課程の授業を聞くということで、課題やレポートの量や内容に不安を感じる方もおられるかもしれませんね。

私は修士課程に在籍していた現役の看護師さんには、最終レポートとして「災害医療に対する考えが、この課程で学ぶ前と後でどう変わったか」「災害医療に対して自分はどう関わり、何に取り組んでいくのか」「大学院で学んだことを今後のキャリアにどういかしていくか」といったことを中心に書いていただきました。非常に真摯に取り組んでいただき、近い将来、きっと私たちと災害医療チームの良い仲間になってもらえるのではないかと期待したほどでした。減災・医療コースの皆さんにも、同じようなレポートをまとめていただこうと考えています。

自分と他者の専門性を知り、活かす

——減災・医療コースではどんな内容を学ぶのでしょうか。

笹野 「減災・医療学概論」では、多職種の専門家から災害や減災に関連した講義があります。「減災医療学特論」では、救急医療・災害医療について、専門家でない人にも理解できるレベルで解説し、そ

の内容をどのように伝えていくかを考える授業になっています。

服部 医師、看護師、薬剤師など名古屋市立大学病院の第一線で活躍されている方から経験に基づくお話をさせていただきます。私たちはこの数年で新型コロナウイルス感染症という未曾有の災害を経験しました。名古屋市立大学病院は最前線に対応しましたので、感染した妊婦さんに対応した産婦人科の先生や呼吸器内科の先生など、いろいろな方からお話をさせていただきます。

また、現場での実践と併せて「論文をどう読むか」ということを学べる授業もあります。

酒々井 岐阜薬科大学と連携した、モバイルファーマシーを活用する授業もあります。モバイルファーマシーとはトラック車両を改造して調剤など薬局の機能を搭載した車両で、これを使った演習や実習も多職種連携PBL演習として行います。モバイルファーマシーは、例えば2016年に発生した熊本地震などの災害現場でも実際に重要な役割を果たしています。こうした事例からも学べるプログラムとなっています。



モバイルファーマシー

——減災・医療コースの受講生に身に付けてもらいたい知識やスキルにはどんなものがありますか。

酒々井 やはり一つは減災や医療の専門知識です。災害弱者といわれる方や、特殊疾患を持つ患者様への対応などを含んでいます。

もう一つは、課題解決のスキルやコミュニケーション能力、あるいはリーダーシップです。先ほど笹野先生がリエゾンとおっしゃいましたが、異なる職種の間を繋ぐ人を育てたいと考えています。

TEEPには専門コースの前に基本コースがありますが、教育システムとしてよく考えられた内容です。受講生の実務家としてのコンピテンシーを可視化・言語化して、これからのキャリアにいかせるプログラムにな

っているところが素晴らしいです。さらに、多職種連携PBL (Project Based Learning) という課題解決型学習もあり、教育のプランニング力、ソーシャルデザイン力 (社会の課題解決の立案など) も修得できます。

減災・医療コースでは、基本コースで身に付けた課題解決力をベースに、災害発生時から慢性期・復興期まで多職種と連携しながらケアできる、災害医療の専門知識を身に付けていただきます。減災や災害医療の現場でリーダーシップを発揮できる人になっていただきたいですね。



救急救命士養成教育の実習風景

笹野 私も、やはりTEEPの一番の特長は減災や医療に加えて実務家教員としての在り方を学ぶ基本コースがあることだと考えています。私自身が受講したいほどです。ご自身の専門性を基本コースで振り返り、教員として、あるいは職場のリーダーとしての指導力を身に付けた上で、専門コースを履修していただくと、より深い学びが得られると考えています。

コロナ禍というまさかの災害で医療の需要と供給のバランスが崩れてしまったとき、愛知県は比較的上手くこの混乱に対応できてきたと思います。それはまさに行政と医療従事者をつなぐリエゾンの役割が重要でした。この役割を果たすには、お互いに何をやっているかを知っていることが大切です。ですから、ぜひ減災・医療コースで医療従事者も行政の方も一緒に学んでいけたらと考えています。

——多職種のチームでリーダーシップを発揮する上で、意識してもらいたい点やマインドはありますか？

酒々井 減災を考える上では、医療職はもちろん行政機関、市役所や警察・消防、自衛隊との連携も考慮しなければなりません。また、通信や運輸といった企